

SAUL BELLOW: *IT ALL ADDS UP*より (5)

池田肇子

ジェファソン講演 II¹⁾

私の魂を案じた親切な友人が、『世俗的な成功』²⁾というかなりの部数を出版された小型本を送って寄越した。初めての成功をいやなことと呼んで、私達の最も深刻な病気—実現した野望のあさましい現金的解釈—の源と同定したのは、ウィリアム・ジェームズであった。成功は、こんなにも多くのアメリカ人に道徳的だらしなさを来たしたことで咎められるべきであると、彼は考えた。

私はこのアンソロジーを喜んで受け取った。と言うのは、大多数の人々と同じく私は恥ずべき欠点に気付いており、正確な診断を熱望し矯正と治療をありがたく思うからである。私の関心を引く最も簡単な方法は、改善の面から私に近づくことである。そこで私は時々この手引きを手に腰を下ろし、ソーローやウォルト・ホイットマンから引用したぎよっとさせられる向上のための数行を読む。しかし先日私はふと、これらの偉大で幸運な男たちは二股か

1) 本講演のII部は、1977年4月1日、シカゴ・ドレイクホテルのゴールデンコーストルームで開かれた。

2) *The Bitch Goddess Success*. "The moral flabbiness born of the exclusive worship of the bitch—goddess success. That—with the squalid cash interpretation put on the word success—is our national disease." [The Letters of William James (1920). To H. G. Wells, September 11, 1906] William James (1842-1910) アメリカの心理学者、哲学者。機能主義的傾向の心理学、プラグマティズムの創始者。

けていた、即ち彼らは二重の意味で成功したということが思い出された。ホイットマンは、見事な詩を書くことに成功したばかりでなく、成功を見通してそれを超越したのだ。彼は、アメリカの天空に双子の星一詩と戒めとして耀いている。

私たちはいつも成功と同様訓戒によっても魅了されてきた。思い出して頂きたいが、アメリカは刺繍の見本と『貧しきリチャードの暦』の国である（あるいは、かつてはそうであった）。祖母たちはもはや、眠れる怠け者の格言を身をもって演じながら刺繍することはなく、批評精神は変わったとは言え、新しい形態で強力に偏在している。成功の女神の背後で陰ながら働く非難の女神がいた。目立たないが、彼女は恐らくもっと強力で永続的であっただろう。彼女は今日全てのアメリカ人によって体験されている普遍的な不安の中で感じられている。ロックフェラー一世が、自分は社会の財産の保管人であり、神の摂理によってその任に専念すると宣言したとき、彼は頑強に第二の女神に対して自身の立場を弁護していたのだ。ウォール街に今日そのようなことを言うような銀行家がいるだろうか。神はもはや資本家によって呼び出されはしない。数年前、アイゼンハウアー大統領内閣の一員がゼネラルモーターズ社に利益になることは、この国の利益になると言って、物議をかもした。大君の知恵はもはや尊重されないのだ。成功に対する疑念が増した。いいですか—非難の女神は成功の女神よりも強いのです。アスペンのセミナー³⁾で、マックス・ウェーバーのことを学び飼い慣らされた管理職は、プロテスタンティズムの倫理⁴⁾を口にするが、それはしかし幻影、つまり宗教が持つ消滅した力の一つとしてなのだ。罪と説教の時代から伝えられてきたものは、道徳的欠陥についての漠然とした認識、受けるに値しない有利な立場、幸運

3) Aspen コロラド州西部の都市。標高2,400メートルの高地にあり、ウィンタースポーツの中心地で、夏の文化講座でも知られる。雑誌『ニュー Yorker』の創始者ハロルド・ロスの生地。1949年に開設されたアスペン人文研究所が社会の指導者のための文化講座を開いている。

4) 労働への献身・儉約・労働の成果を上げることを強調する。資本主義社会の支配的エートス。

を感謝していない意識，即ち，この奇跡的に成功した国が悪を為し自然を損ない汚染し，悲惨な戦争をしかけ，弱者つまり黒人，子供，女性，老齡者，全世界の貧しき人々に対してその義務を果たし損ねたという感情である。

こういう風に自らを責めるなんて私たちは間違っているのだろうか。私はそうは言っていない。

当面は，私達の非難に対する格別の鋭敏さと欲求のみを考察する。私たちの知識人の多くは，脆弱な国民を，心を苛む心配と良心の呵責で苦しめ，叱りそして感染させながら，非難の女神の祭司として働く。彼らは，成功の女神に仕えていないと主張できる。個人的には成功（の女神）を免れているので，単に非難のために成功を口にするのだ。こういうわけで，私の思慮深い友人はりっぱに印刷された小型本を送ってくれたのだ。

実際は，成功の女神はトーマス・エジソンの蓄音機と同様時代遅れである。

編纂者たちは，ウォルト・ホイットマンが口やかましい人のような印象を作ってしまった。ホイットマンはこのような形容では収まりきれないほど偉大なのだ。アメリカの文学的，道徳的失敗—腐敗，空ろな心，墮落，心の地獄—に対する彼の告発は，私が半世紀前に，彼の『民主主義的展望』で最初に読んだときと同じように新鮮で真実である。この世俗的成功本の他の寄稿者の中には印象のうすい道徳家もいるが，私は彼らの攻撃も歓迎する。なぜなら私は，H. L. Menckenと同様攻撃されることは害よりはむしろ益になると信じているからである。1920年にセオドア・ドライサーに宛てた手紙で彼は言っている—「どんなに誠意のない非難でも，あらゆる非難には常にいくらかの真実がある。私は称賛からよりもむしろ非難から多くを学んだ。最も悪意のある非難にさえちよっぴりもっともらしさがある。無条件な称賛には常にどこかきまり悪いところがある。人はそれを受けるに相応しくないと内心では分かっているからだ」。

かくして，因襲打破主義のメンケン氏でさえ，我々罪人はできる限りの援助を必要とすること，祝福されるよりは貶されるほうが有益で身が引き締まること，人間がもっと堂々たる邸宅を建てるためには，敵のみが与えること

のできる建設的提案なしでは済まされないことを感じている、本物のアメリカ人であることが判っている。アメリカ人は歴史上最も格言好きな国民に違いない。信仰心を持つには余りに忙しすぎるので、彼らは常に自分たちは切に指針を必要としていて感じてきた。私にはアメリカで最も強力な道徳的指針は、一時期としても、ボーイ・スカウト便覧であったと思っている、と語る友人がいる。彼は、この本の道徳的感情が、純心な何世代かの若者たちに高い信念に基づく欺瞞に備えさせることによって、大変な害をもたらしたと信じている。女の子たちは、そのような教えに妨げられなかった、と主張する。母親たちが現実の世界で育てたからだ。娘たちは自分のもつ強みを明白に理解し、それを手際よく処理した。このことから彼の所謂「大ガラハッド症」⁵⁾が生じるのだ。彼はさらに続けて、性的悲惨、母親嫌悪、アルコール中毒、『偉大なるギャツビー』以来書かれてきた500のアメリカ小説に見出されるようなそのような打ち砕かれた幻想からなる絵を描いている。

しかし、私は主題を逸れてはならない。『世俗的成功』には、役に立つ提案、即ち思索のための呪文があふれているとわかったので、私は毎日読むようになったと今まで言っていた。例えば、チャールズ・アイブス氏⁶⁾は、諸芸術のコンクールを批判する際に、「精神的な生活と日常生活の密接な結びつきが必要である」こと、また、日常生活と精神生活のバランスをとらなければならない、と言っている。このことは勿論大切なことである。しかし、腹立たしい事実、これらの明らかに真実の事柄を口にした後に、まだこのことに直面している、ということだ。というのも、アイブス氏が、日常の例をあわてて探しながら「カンザスの小麦畑での一ヶ月は若い作曲家にとってローマでの3年よりも役に立つかも知れない」と言うとき、人は彼自身がカンザスの日常生活を最後に見たのはいつだったのかと自問する。さらに彼は

5) Galahad [アーサー王伝説] Lancelot と Elaine の息子で聖杯を取りもどす宿命を負っていた。円卓の騎士の中で最も気高く純潔な騎士。最も高潔な理想にあくまでも献身する性格の人。

6) Charles Edward Ives (1874-1954) 米国の作曲家。超絶主義者の一人。

言う。「これらクレイオー神⁷⁾の候補者が実生活で多少探究できるように、もしジャガイモ畑が3000ドルのあらゆる賞に代えられるなら、芸術の空気は多少きれいになるかも知れない」と。それから彼は、フランスの道德家を引用することによってわずかに抑える—「人は、自分に忠告するほど気前よく与えることは決してない」。しかしそのうちに抑えなくなる。ジャガイモを掘るだって？カンザスの小麦畑だって？こういった小麦畑を試みようとした最後のアメリカ人芸術家は、第一次世界大戦前の日々に美の福音を説教しようと出掛けた時の、ヴェイチェル・リンゼー⁸⁾であった。カンザスでは、1910年に行なっていたように今は（小）麦束にして運んだりしていないのだからアメリカ合衆国とその大都市における日常生活が、今の状態なのだ。

さらなる啓蒙を求めて、同小型本中の有名な建築家、ルイス・H・サリバン⁹⁾—彼はシカゴで長年活躍した—の寄稿を見る。彼は次のように語っている。「人は建物、建物は人である。人と建物は同一である。お互いに相手の忠実な肖像なのだ。一方を読むことは、他方を読むことである。一方を解釈することは、他方を解釈することである」。もしこのことが真実ならば、サリバン氏はアイブス氏の命題をすっかり説明したことになる。日常生活と精神生活間の均衡は、目前に見えるものに表れているのだ。ところで、私はシカゴで人生の大半を過ごして、紛れもなく、通り、家々、工場、官公庁、6部屋アパート、摩天楼に影響されてきたが、シカゴと私が完全に互いに反映し合っていることには同意しかねる。サリバン氏は、ここで論争上の必要から誇張に走っているからだ。これは預言者がよくやることだ。彼らは誇張しなければならない。サリバンは、自分の予言的高みに達したとき、「気をつけよ！」と声高に言う。

人は、建物を本の中のこと—過去のことと—思ったのか？違う！

7) Clio 歴史の女神。the Muses の一人。

8) (Nicholas) Vachel Lindsay (1879-1931) 米国の詩人。

9) Louis H (enri) Sullivan (1856-1924) 米国の建築家。

決してそうではない！建物は、常に当面のそして人々のことであつた。今では現在の、そして人のことである！現代アメリカの建築は、自然のままであることを恥じるが、うそをつくことは恥じない。この建築は、偽善ともったいぶった偽善的なことばであふれている。そこで、同様に人もそうなのだが、人はそうではないと言う。この建築は神経衰弱症的だ、だから人は激しく浪費する。それでは、これが民主主義なのか？この建築には静謐さが全くない—（これは）国民がバランスを失っている確かなしるしである、人は充実した生が何を意味しているか知らない—人は不幸せで、熱にうかされ混乱している。これらの建物では金は低俗にも高き所に奉られ、従つて人は金を人間の上位におく。人は日々24時間金を崇拜する、つまり、金は神なのだ。これらの建物は、偉大なる思想家、本物の人間の不在を示している—もっとも人はいま窮地にあつて、偉大なる思想家、本物の人間を極度に必要としている—しかし、ちらほら建物は完全性を示す—だから人はその程度の完全性を持つのだ。全てが偽りと言うのではない。建物に発見されるパン種のすべて—そのようなパン種は人のなかに見出される。重さには重さ、寸法には寸法¹⁰⁾、記号には記号—人は建物、建物は人なのだ！

そこで人々はしかられて、教会で説教を受けた気分になつて、晴々として得をした気になる。勿論、ここには多くのものがないわけではない。ラスキン¹¹⁾のメッセージも同様であつた。また、ウィリアム・モリス¹²⁾もいたし、さらにお望みなら悪魔のような工場とロンドンの勝手気ままに使っている町の通りを有するブレイクさえも。もっともブレイクは、通りは人、人は通り

10) Cf. Shakespeare, *Measure for Measure*

11) John Ruskin (1819-1900) 英国の評論家・社会思想家。 *Modern Painters* 5 vols. (1843-60).

12) William Morris (1834-96) 英国の詩人・美術工芸家・社会運動家。

とは決して言わなかっただろう。人は、魂と家をぴったり符合させる建築家にならなければならないだろう。それでも人は容易に理解できる、世紀の転換期のシカゴが、小屋、スラム、平屋、作業室、駅、豪華なホテル、木賃宿、貨車操車場、倉庫、金持ちの大邸宅や墓を視察するサリバンのような人間にたいして行なったに違いないことを。サリバンは容易に単眼思考タイプの人間だと同定される。民主主義は、私たちがお金のためではなく現住者のために建設するならば、救われるかも知れない。ロマン主義的人類の同胞は、各自解決策がどこで見つかるかを正確に知っていた。ハイスクールでカーライル¹³⁾のロバート・バーンズ¹⁴⁾に関する有名なエッセイを学ぶように割り当てられ、私は読んだ—「私に一民族の歌を書かせて下さい。そうすれば人はその(民族の)法律を書くことができる」。私はこのことに驚かなかった。シカゴで育ったので、同様の主張は何十回もきいていた。肉食主義者は、私たちが動物を賭殺することを止めさえすれば、戦争は終わるだろうと論じた。パンの味にうるさい人は、漂白小麦粉を禁止することによって社会の腐敗をくい止めるのだと要求した。タバコの敵である禁煙講演者は飲酒や喫煙に、サリバンに「気をつけよ！」と叫ばせたと同規模の危険をみた。ハイスクールの卒業して、非常に立派な知的領域に移行したから、私はもっと厳正な理論家たちから階級闘争とプロレタリア革命について、あるいは文明を破壊しつつある性を起源とする性格異常について、相対する関係者たちを互いに不可解にする語義の混乱について学んだ。災難の原因があれば、その救済法があるものだ。

数ヶ月前、オーストリアの作家カール・クラウス¹⁵⁾が臨終の床で日本人が満州に攻め込んだというニュースを聞いたときに言ったこと—「人々がコン

13) Thomas Carlyle (1795-1881) スコットランド生まれの評論家・思想家・歴史家。 *Sartor Resartus* (1833-34), *On Heroes, Hero-Worship and the Heroic in History* (1841).

14) Robert Burns (1759-96) スコットランドの詩人。主としてスコットランド語で恋愛詩・自然詩・諷刺詩を書いた。 *Auld Lang Syne*, 愛国的な *Scots*, *Wha Hae*, 魔女伝説を扱った *Tamo Shanter* など。

15) Karl Kraus (1874-1936) オーストリアの批評家・詩人。1899年雑誌 *Die Fackel* を創刊、中産階級・自由主義ジャーナリズムを攻撃した。

マの使い方にもっと厳密でありさえしたら、このようなことは何も起こらなかつたろう」一を読んでうれしかった。詩人にとって、すべてのトラブルを起こすのは、言語と良き慣用の墮落なのだ。しかし、クラウスは賢者の如く話し、偏執狂とは違って、あらゆる人が平和と幸福をもたらす唯一の救済法を知っている、と確信していた。死に行くクラウスは、死という十分なる重圧の下でいかなる確信も不条理から完全に自由ではあり得ないと認めながら、自分の天職にずっと忠実であったようにみえる。間違った句読法は、階級闘争、性的ノイローゼ、大量生産のパン、あるいはみにくい建物と同様に状況を見極めてはいないのだ—このように私は、クラウスのコメントを解釈する。

芸術家は、無秩序な現代の現実を避けることはできない。銀行家、建築家そして大衆に名誉で建物を建てたり、あるいは心理的性的または政治的理論を採り入れることによって民主主義を救うように訴えながら、芸術家は悲しいことに時代が好意的な時でさえも、ニーチェが言うところの運命愛、つまりありのままの姿を容認せよという命令に縛られている。このような受容は放棄ではなく、巨大な複雑系を必然的に容認することなのだ。自身をこれら個別の見解のいずれか一つに限定すれば、芸術家の現実からの乖離を結果するだろう。つまり、見えることから、また見えるものを理解することから切り離されるだろう。この巨大な複雑系は、最高のデータなのだ。それは、私たちの偉大なる与えられた状況なのであり、私たちのものなのだ。

ギリシアの詩人セフェリス¹⁶⁾の日記を読むと、私は大事なくだりに出会う。セフェリスは、病気の友人シケリアノスに語りかけている。「私は彼の安否をたずねた。『たしかに、私には高血圧があるが、これはシケリアノスの高血圧なのだ』と、彼は答えた」。

同様なことばがアメリカの作家の国家—この反詩的国—に対する関係に適應できる。というのもこの国家は、トクヴィルのようにこの大部分を称賛すべきであると認めた人々によってさえ、反詩的と呼ばれてきたからだ。詩人

16) George Seferis (1900-71) ギリシアの詩人・外交官。本名 *Georgios Seferiades*。ノーベル文学賞 (1963)。

カール・シャピロ¹⁷⁾は—『子供を追い払うために』という随筆の中で一次のように書いている。

アメリカで生きることは相当な勇氣（勇氣もしくは強力な無氣力のいずれか）を要する。実際、反詩的風土の中で生きることが私たちの詩的刺激の主たる形態なのである。このことは20世紀合衆国詩の名詩選を読めば分かるだろう。主題の上では詩はほとんどすべて同じである。即ち、冷暖房装置のついた悪夢の国の生活なのだ。20世紀詩が、この主題を殆ど専ら利用することに満足してきたことは、私たちの詩のもつ主たる弱点なのだ。それは全て進歩という恐怖、ピューリタンの勤勉、不首尾に終わった成功、社会的性格が行なう裏切り等々に関連している。私たちは非常に社会に関心をもつ詩人グループであり、個人的罪と全く釣り合いがとれていない歴史的罪の意識という重荷を背負っている。アメリカの状況にはどこか反詩的なところがあるということがアメリカの詩人の中に幼い頃からしみこんでいるのだ。詩人の中にはそのことを社会制度のせいにする者もいれば、経済制度、精神的信心の不全、科学という名の宗教のせいにする者もいる。しかし、全詩人が標的としてアメリカ流の生活を利用しているのだ。

冷暖房装置のついた悪夢もしくはアメリカ流の生活にシケリアノスの標準を適用してみよう。またこれにルイス・サリバンの「建物は人、人は建物」についても試みよう。シケリアノスが高血圧に対して持っているのと同じ関係を、私はシカゴの建物に対して持っている。目まいの発作、気を失う発作はシケリアノスのものであり、シカゴの街路は私のものなのだ。

日記の中でセフェリスは、この時期に彼の身に降りかかってもおかしくな

17) Karl Shapiro (1913-) 米国のユダヤ系詩人・批評家。1950-56年 *Poetry* 誌の編集を担当。身近な事柄を通して現代の諸問題を取り上げる。

かった最悪の事態—40年代におけるヨーロッパの大量殺戮，亡命，虐殺を目の辺りにしたこと，死の収容所—を経験したと書いている。彼は言う—「どつとあふれる感受性が私に，あたかも保護する皮膚をはがれて，傷口が開いたままさ迷い歩いているかのように感じさせる。ほこり，ハエ，むごたらしい身ぶり—すべては大変いたましい。本心から私は，品位をもって時にはこの感受性を抑制しているも同然の日を待ち望んでいる」。

さて，このような背景のもとにサリバン，シャピロ，シケリアノス，セフェリスから引き出したヒントを心に留めながら，私はこの冬シカゴの街を歩き回り，そして現在の姿を考察し，また40年以上前はどんな様子だったかを思い出すのである。変化がゆっくりしている都市がある—フィレンツェの人は肩をすくめてほんの40年として言下に退けることがあり得る。しかしここでは何世紀もの変化が数年に詰め込まれ兼ねず，当時と今のシカゴは，ストーンヘンジがコンピューターとかけ離れているとおりはるかにかけ離れていることもあり得る。薪を炊くオーブンの時代に知り合いの製パン所では，口は悪いが善良なパン屋が両手のこぶしで大桶の中のパンをこねたり，長い木べらでオーブンから焼きあがったパンを引き出したが，今では自動化されている。作業している人々は，研究助手のようにみえる。当時の監視人ペトルーシュは，機械で指を一本失った男だが，酔って小麦粉袋の上で寝ると，ねずみたちが彼の足を跳び越えたりした。今では袋ひとつ見かけない。機械が，ホッパーを一杯にする。かつて仕方なく見逃されたねずみはすっかり姿を消した。新工場を取り囲む街並みは大して変化していない。ポーランド人の平屋と6部屋アパートは今も建っている。プエルトリコ人が移ってきているからポーランド人は肩身の狭い思いをしている。

ポーランド人は，彼らの財産を大切にした。家は見事に修理が行き届いていて，レンガ積みは目地仕上げされ，蟻のような赤，チョコレートあるいは緑の塗料が塗られていた。ドール バルブ社やキャロル街の棺桶工場の従業員，卸売業と缶詰工場の労働者，錠前屋，電気技術者，プレス機の技師たちは，終業後帰宅するとパイプを組んで作ったフェンスにペンキを塗ったり，

庭木を手入れしたり、木製の戸口階段を修理した。主婦たちは芝生の上の古い洗い桶の中で育っている花を手入れする時、フリルのついた白い透明なキャップを被っていた。今でも思い出すが、ものうい夏の午後など地区全体が野球の放送で活気にあふれ、黄金イエバエはイボタノキの垣根のなかで眠っていた—なぜこんな生垣がハエの学寮になったのだろう。もちろん私は20年代、30年代を思い出しているのであり、当時のシカゴはこのような地区で成り立っている都市であった。

禁酒法¹⁸⁾時代の暑い日曜日には街路に自家製ビールと手作りのザワークラウト¹⁹⁾のおいが漂った。結婚式は、足を踏み鳴らし大騒ぎをして3日間続き、路地では殴り合いの喧嘩があった。自分でザワークラウトを作り自家製のピーバ²⁰⁾を飲み、ポーランド語やウクライナ語で宣誓したからと言って、必ずしも外国人ではなかった。第一次大戦のポーランド人退役軍人たちはコシチューシコ記念日²¹⁾に集まり、フンボルト公園内を愛国心もあらわに行進する際には、楽隊がアメリカの歌を演奏しポーランド国家連盟の旗をかざした。行進する人々は、ポーランド語か、英語を基にした共通語つまりアメリカ語のいずれかを話した。と言うのも彼らはアメリカ人だったからだ。アメリカ人であることは、領土や言語の現象ではなく、概念つまり、実は一組の観念であった。全く非伝統的で歴史上は変則的なことを、このように意識されることは滅多にないが、集団となって遂行しようと努力することは、エイブラハム・リンカーンによって「自由のために構想された」とか「全ての人間は平等に創造されたという命題に捧げた」というような語句に正確に表現されてきた。私は、諸君の注意を「命題」や「構想された」という語に促す。移民のアメリカ的なものは、ある程度概念的であり心的選択と関わっていた

18) Eighteenth Amendment 米国憲法修正第18条(=Prohibition)。酒類の製造・販売を禁止した法律。1920年成立したが1933年の修正第21条で廃止。

19) sauerkraut 塩漬け発酵キャベツ(ドイツ料理の付け合せ)。

20) piva ポーランドの地酒

21) Thaddeus Kosciuszko (1746-1817) ポーランドの愛国的軍人。アメリカ独立革命軍で活躍した。

のだ。非常に意義深い歴史的発展が抽象概念の選択で始まるということが重要でないはずがない。現代の人類は、発展のどの段階においても抽象的な選択を避けることはできない。マルクス主義もまた文化も伝統も持たない労働者階級に概念を提示したが、革命党に参加した後は思考は継続し得なかった。さあ、これが危険なことなのだ。アメリカ合衆国では、必要とされる批判的知性はやがて出てくることはないかも知れないが、法律で禁止されてはこなかった。それ（批判的知性）は、生活状況によって挫かれてきただけなのだ。

1924年の移民制限法が、この都市の性格を全く変えたというのが、私のアマチュア「都市問題研究者」としてのこれまで変わらない意見であった。もはや、大工、印刷工、機械工、ケーキ職人、靴屋、看板屋、街頭楽士そして起業家は、ギリシア、セルビア、ポメラニアやシシリーといった国からやって来なかった。こういった職業は、移民二世にとっては品位を損なうものだった。彼らは向上し出世した。彼らが立ち去った近隣は南部やプエルトリコからの国内の移住によって再び居住された。ケンタッキーやアラバマから来た白人や黒人の田舎の人々は、移民たちがしたようには都市型の技術と慣習をもたらしたりはしなかった。流れ工程の産業は熟練労働など必要としなかったのだ。

私たちが今や「異民族居住地」と呼び習わすようになっているものは、とっくの昔に寂れた。スラムは、私の友人がかつて言ったとおり、滅びたのだ。彼は冗談を言っていたのではなかった。私たちが1920年代に見知っているスラムは、ヨーロッパの移民によってまだ維持されていた頃は素晴らしいところで、ヨーロッパの感触に憧れる WASP の人々はもとより、芸術家やボヘミアンたちをも魅了した。これら近隣の荒廃の主なる結果は、こういった機会—犯罪の増加、麻薬中毒、福祉問題、都市生活の無秩序の一切合切—に常に議論されているので私は申し上げますまい。変化に伴う三つの副作用のみを挙げることによって、分析的思考の人々の怒りを宥めたい。即ち、アメリカの都市から快適な生活が消えたこと、成長し続ける巨大な郊外から沸き起こる文化的白カビというしめっぽく気の滅入るにおい、自由奔放な社会のス

ラムから大学への移動。しかしこの辺りで止めよう。

バンガローや6部屋アパートを見ながらシカゴの街を歩き回っていると、私は時々予言者サリバンのことを思い出す。建築家たちは、3階建て6部屋アパートが(平屋建て)バンガローの原理をアパート建築に拡大しているのだと私に語る。50年後、人は、これらレンガ造りを受け入れるようになる。建築家の「理念」を理解するのだ。「彼」がどういうタイプの間人かを理解し、嘆かわしいときもあるその仕事を温かく迎える。典型的な6部屋アパートの入口には、片側に3つ真鍮製の郵便受けと呼鈴、そして短い階段がある。心地よく擦り減ったインディアナ産の石灰岩もしくはヴァーモント産の大理石の階段が、中央階段へと続くガラスの扉へと導く。時にはもっと堂々とした入口もある。2本のドリア式やイオニア式の円柱を備えたところもある。また、台座に大型の不恰好な四角のプランターがあることもあるが、ゼラニウムやシダのためのつもりなのになにいつも固い泥と昔からのゴミであふれている。気取った建物には正面に一对のライオンの彫像があったが、いまや侵食と年月に打ち負かされて羊のように角が取れてしまっている。正面に6つの出入り自由のベランダ付きというのはシカゴではよくみられ、装飾的に積まれた粗製レンガは少々歪んで見えた。楡の木は虫害にやられてしまっている。最もよくみられる日陰になる木は、ヒロハハコヤナギである。舗装が行き届いている通りは少ないが、空き地はたっぷりある。土地は安かったし、政府は土地を惜しまなかった。歩道と縁石の間には草むらが、建物の間にはセメントの通路があり、それから小ぶりのガレージが一行に並んでいる裏通りに面した広い裏庭があった。シカゴの裏側ベランダは木製で、階段は雨ざらしの粗末な作りで長いX字型に梁に打ち付けられた板の桁構えで支えられていた。これらは、今でも高架鉄道に乗ると見かけるものだ。30年代に初めてニューヨークへ旅した時、三番街高架鉄道の線路がアパートの客間の窓にとっても近いのを知って驚いてしまった。シカゴには常にたっぷりの空き地があった。シカゴは醜いが広々とし、大量のもの、広い眺め、全くあてにならない空家、²²⁾ 広大な灰色、広大な褐色、大きな雲を目にする機会にあふれて

いた。電車は夏のベルベットのような夕暮れに、よごれていない（他は何一つきれいではなかった）鋼鉄製のレールの上を灰色の木製ベランダ、汚れた灰色の階段、桁構えの無様な材木、滑車のついた洗濯ひものあるシカゴの裏庭のなかをガタゴトとスピードを上げて走っていたものだ。サウスサイドでは家畜一時置場の毒気のなかに真っ直ぐ進入した。強烈な臭気は太陽自体にも感染しているように見え、その結果太陽は輝いているばかりか悪臭さえ放っていた。

ところで私は、6戸単位のバンガローのように三文建築家の単純な設計で、経済的に建てられた単純なシンメトリーの6部屋アパートメントのことを話していたのだった。台所の上に台所、浴室の上に浴室、サンルームの上にサンルームといった、厳密な規則性は配管、暖房そして配線工事を取り付けるのに安上がりである。このような大量生産にはそれにも関わらず装飾的な仕上げ、気の利いた手際、エレガンスと向上心の雰囲気があった。各戸の表の部屋（誰もかつて客間と呼んだことはなかった）には、模造の丸太の入った見せかけの暖炉があり、内部に電球が隠されていて、この電球の熱がひだのついた円盤をはためかせ、円盤は回転しちらちらと動く影を映した。偽の暖炉の両端にはアール・ヌーボー調のガラス扉のついた本棚があった。これらの上のマントルピースの両端には2つの小さなこれも鉛枠のついた開き窓があった。百合の花が最も一般的な装飾だった。トイレにまで一枚か二枚のステンドグラスの窓があったかも知れない。食堂は、腰ほどの高さの中国製飾り棚で表の部屋と分けられていた。これに加えて、一対の中空の木製柱（何の役にも立たない）が時折立っていた。食堂には、同じ様式の、しばしば斜めに切った鏡のついた作りつけの食器棚があった。10万単位で生産されるこれらの据付家具は、手早くかつ安価に取り付けられるようにデザインされていた。

これが、シカゴの大部分の暮らし向きであった。6部屋アパートの壁を通

22) 不法居住者 (squatter) が占拠している場合があるから。

して殆ど物音は聞えなかった。時折蛇口がひねられた時に水道管はとぎれとぎれに水を出し、ガタガタと音を立てた。隣人たちがピアノを弾いたり、フォックス・トロットを踊っているのが聞えるのは、天井越しであった。疲れて短気になった主人のどなり声や冬の夜の台所での心地よいぶつぶつという会話、あるいは1階では階下のボイラー室で管理人がショベルをきしませるのが聞えた。どこにでもある心地よい物憂さ。物理的宇宙では原子より小さい粒子は波動しないとか、目に見えない星の爆発は事件ではないというのと同じ意味で、全く何事も起こらなかった。出来事はあまりに小さくあるいはあまりに大きかったので、起こったと気付かれなかったのだ。その間人々は客間やベランダで腰掛けていた。

先日、短い冬の午後が終わる頃、私は友人と例の6部屋アパートの一つである彼の3階のアパートで、外の霜で固まった雪と太陽を浴びてたなびいている煙が温度の零下下降につれてゆっくりと上がるのを見遣りながら腰掛けていた。私たちは食堂で一杯飲んでしたが、ここは建物の後ろに面していて裏階段とベランダ、実際的な大工によって打ち付けられた味も素っ気もない木工細工一同じ手すり、同じへぎ板、踏み板、仕上げ板、床板はシカゴっ子にとって自分の体と同じように親しみがあり、肉体的存在を支えていた。こういった木材の傍らに冬ごもりしているヒロハハコヤナギーワニのような樹皮のついた大きくて煤け、柔らかくて気品のない木—は、このような環境に生い茂る類の生物体なのだ。ヒロハハコヤナギは、どうしてか舗道の下から出てきて、首尾よく夏の暗やみとその生物としての成長の取引をする。4月には細くて色っぽい尾状花序を落とし、通りには一日か二日芳香が立ちこめる。6月には白い綿毛を放出する。7月になると広い槍の穂先状の葉は磨いた革のようにつやがある。8月までには全体が茶色の繊維状になる。

教授連は、シカゴ大学近くのハイパークにある6部屋アパートで平穩に暮らしているが、南北に数ブロック行くと黒人スラム街になる。ウッドローンとオークウッドにおける異なった生活が6部屋アパートを取り壊し、それらは爆撃されて追い出されたような様相を呈したままである。すぐ売れる金

属は剥がれ、内部が引き出され、銅線は寸断されて屑として売られ、窓はすべて割られ、終には火事が起こって何も無くなる。これら荒廃した通りには一人一人いないこともある—いるのは犬1匹か1, 2匹の野ねずみだ。草地の囲い塀は破られている。確かに、囲いは野暮で、不恰な木材の4×4の手すりを斜めにおいたもので、上を向いた先端は凭れ掛かるのを思い留ませる。しかしこれらさえ盗まれ焼かれていた。草地自体は踏みしだかれて固い地面になってしまっている。

荒廃したシカゴで何が起きているのかを知りたいければ、福祉制度を検討し、グラマースクールとハイスクールで調査し、社会学者（の本）を読み、警察官と消防士に話しかけ、立ち退き裁判、少年裁判、暴力裁判、病院、診療所、少年犯罪者のためのアウトディ「ホーム」、郡刑務所を訪問しなければならない。法廷で心を打たれる最初の事実は、かくも大部分のシカゴの黒人たちが武器を所持しているということである—男も女も子供たちでさえもピストルを持って街へ出かけるのだ。警察が銃の不法所持で逮捕する時、彼らは第4条修正案を持ち出す被告側の弁護士による尋問で正当であると弁明しなければならない。止めてボディチェックをする。「被告（人）が武器を携帯していることがどうして分かったのか」「ジャケットの胸が開いていてそれがベルトに差し込まれているのがみえたからです」。あるいは検察当局は、裁判所の気の利かない諸手続に従いながら言う、「警官、サウスローンデイルにあるあの家屋敷に踏み込んだ1月4日夜に注目して何故そうしたのかを本廷に述べよ」。「午後1時15分にこの住所地で無許可の酒が売られているという通報を、私たちに調査せよと指示する無線を受けたからであります。ここは焼け落ちて没収と定まった建物で、そこで私たちは無許可の酒を飲んでいる16人の男たちと板の上に酒瓶と並んで置いてある2丁の銃を発見しました。被告人は自分の銃であると言いました。この銃の許可は持っていませんでした。私は彼を逮捕したのです」。プエルトリコ人の小実業家はバンを運転中に度々車線を変更していたため警察に止められた。彼は銃を所持していた。「裁判長どの、私は金—1200ドル—を銀行に持って行くところでした。

金を盗まれたら、商売を止めます。私は身を守らなければならなかったのです」。裁判長はこのことを了解し、さらに多くのことも。40代後半の男である裁判長自身、ここ数十年ですっかり変化したこの界隈の出身である。商船隊に入って朝鮮戦争に従軍した。地雷で重傷を負ったが不具になることもなく、今でもハンドボールをし、ウェストで馬を調教しながら男盛りの休日を過ごしている。朝鮮戦争後彼は警官になり、夜間にロースクールに通い、多少の政治的助力で治安判事となった。政治的コネは不可欠である。しかもシカゴでは全く普通のことなのだ。シカゴ市民たちは、昔は行政事務の手続よりも派閥の約束のほうを好んだものだった。彼らは官僚よりも政治家のほうを好んだ。政治家は自分の有権者を知っており、専門家や訓練された行政官よりもむしろRのような男を法廷に坐らせたのは正しい。私たちは今ではこれら高度に訓練された専門家はどのようなものかを知っている。必要とされるのは、常識、都市での体験そして共感であり、R判事はこれら全てを備えている。彼は時々法廷での攻撃者から身を守らなければならなかった。数ヶ月前、彼にナイフで襲いかかった被告は、独房に引っ張って行かれ、ベンチに鎖で縛りつけられた。「ひどく興奮して彼はボルトで床に固定されていたベンチを引き剥がした」と判事は語った。判事自身が11番とステート通りにある夜間裁判所に勤務していた時、ベルトに勤務用の連発ピストルを携帯していたことを、私は知っている。朝4時にシカゴ警察本部から1ブロック内に駐車している車まで歩くのは安全ではなかったからだ。

駆け引きをみせる売春婦、新札の大きな束から保証金を積む麻薬売人、レイプ犯、サーツ1箱を盗んだ男の頭を殴って割るショッピングセンターの守衛、ブルージーンズを万引きしているのを見つけた女学生、無意味な発砲と刺傷と愚かな盗みが法廷へ引きもきらず登場する。判事は語る—私たちが銃を取り上げても、彼らはもっと手に入れる。矯正所へ送っても戻って来るのだと。

学校児童のなかに昔との類似点を探しても無駄である。学校は今や殆ど完全に黒人とプエルトリコ人になっている。シカゴの教師たちは全国で最も高

い給与率で支えられているが、秩序を保つよう支払われているのではない。理屈では少なくともそれは警備組織の職務である。警備は全くない。教師が教えることを決めるのは困難であり、また彼らが誰を教えるのかはさらにもっと不可解である。私は、生徒たちがトランジスター（ラジオ）に夢中になってリズムよく壁の上を叩きながら歩き回っている教室に入ったことがある。誰一人教室には中心があることを理解していないようだった。誰も教師が話している時彼女に注意を向けなかった。この無秩序には子供たちのもつ理解されていない絶望が感じられた。それが人の心とはらわたに重くのしかかった。

子供たちの中には小さなカスパー・ハウザー²³⁾のように、ぼんやりした、蔑られていない者がいた。彼らの心は混乱して暗やみのまま、衝動的に生きている。「の上に」「の下に」「の向うに」といった言葉の意味を知らない。しかし、彼らは性行為、銃、麻薬そしてここでは悪ではない悪についての凶暴な知識を持っているという点で、かわいそうな無垢なカスパーとは違っている。

R判事の法廷に出廷している若い男女の心に触れることができないし、理解することができない。人は彼らが何を考えたり感じているのかを知ることはないだろう。私は一注意して下さい—社会学者の言う下層階級のことを話しているのであって、シカゴの黒人全般、即ち礼儀正しく、教会に行く黒人の労働者や発展しつつある中流階級の人々について話しているのではない。こういった人々を見たところ崩壊しつつある都市で自活し、自分の子供たちが学校の廊下で殴られたり、玄関やトイレで襲われたり、運動場で撃たれたりするのを防ぐために奮闘する。誰も夜、涼風にあたろうと呑気に外に出ることなどしないのだ。

23) Kasper Hauser (1812-33) ドイツの捨て子。1828年 Nuremberg の警察に保護されたが、世間は貴族の子だとうわさし、Baden の大公の王子だと信じるものもいた。教育家 Georg F. Daumer に預けられたのち、Lord Stanhope の養子となる (1832) が、1833年12月わき腹にうけた刺傷がもとで死亡。出生の秘密を教えると約束した人物に会いに行くと刺された本人が語ったという。小説・詩・劇などの題材になっている。

街中での自由を手にするには腰ベルトに挟んだ銃が必要である。もし人が、パッチワークの革製長コートをきちんとボタンを掛けて着、かっこよくふくらんだ真庇のある帽子を被り、カタカタいう台底の靴を履いてベルベル人、ポリネシア人やアメリカインディアンの装飾品をつけ、豹のようにひげを生やすことが必要な都会育ちの東部人の一人であれば、もういつでも見せびらかすことができる。そうして銃、ナイフを所持して出かけるのだ。

ループ（シカゴ市の中心商業地区）では、独創性の強い服装を見かける。そこでは多くの買い物客が、連邦政府によって建てられた高層建築物の中で働く下級の公務員たちだ。正午のループの街路はファッションショーとなる。裁判所や留置場では強盗の嫌疑を掛けられた男たちもまた格好よい身なりをし、汚れているがエレガントで、スエードや別珍に、髪はサフロンやヘナで染めたホコリタケの形に逆毛を立ててふくらませている。破れたシャツを着ているが袖は肩のところで巧妙に襷をとったコートを着た東部人は、脚もとを交差してくるむ赤と黄のひものついた4色の、先が尖っていないブーツを履いている。

『神経症の一兆万長者』の中でノーマン・マクリー²⁴⁾は、共生する商社、政府そして機構としての我が国の主な団体を、重要度を逆順にして列挙している。これら機構とは何か。「一体感」、また「共有される価値観」。産業界で最も生産力のある国であるアメリカ合衆国は、明らかに「生産の後には何があるか」といった奇妙な質問を自らに問い始めたようだ。もしくは「勢いよく日用品を使い始めて、そして今はむさ苦しい魅力というお膳立てで奇跡的な生産性を可笑しな程誇張した目的のために用い、そして明けても暮れても街の生活を芝居に変えてもよいではないか」。

成功について私をからかった、それほど善意のなかった友人は、時勢に遅れてしまった。今日の成功は、額面落ちの証券、誇大広告、大統領職自体を報道対策アドバイザーの助けを借りて獲得することにある。ウィリアム・

24) Norman Macrae (1923-)

ジェームズが世俗的な成功を糾弾した時、彼は築いた財産と国家の発展への貢献によって身らを正当化しながら国（アメリカ）を傷つけ、向こう見ずにも荒廃させた強い悪者たちを考慮していた。他愛ない時代遅れなことではある。

ひょっとすると経済歴史学者シュムペーター²⁵⁾は、中産階級の階級はブルジョワジー（中産階級）にとってもはや重要ではなく、また、中産階級はもはや実際に気にしているはずがないと示唆する際に間違っただけではなかった。

このことから、すべての偉大なる成功—経済的、工学的、組織的—の代価は、人間の品位の下落、シカゴ（あるいはニューヨーク、ローマやキエフ）に見られる荒廃かも知れないと結論づけられるだけである。私たちは、かつての人間のありのままの姿をみるために、聖書、プラトン、シェイクスピアに戻らなければならない。

いまだ考慮されるべくして残っているものは、このことがどうやって起こったかという物語である。そして「歴史の終り」と人間の自尊心の屈辱が芸術家に沈黙を課すべき理由は全くない。人類は、自身について考えあるいは夢想し続ける。人類は華麗さのほうを好むと同時に、悲惨さにも同様に魅了されることがある。ニーチェは私たちに、現代性、「最後の人」の時代がやって来た、と警告した。この警告が向けられる心は、必然的に彼の意味、彼の歴史的メッセージ—彼の話を理解することができる、と想定されていた。

さて、ニーチェは1900年に死んだ。

ニーチェの死後まもない20世紀の初期に書かれた『アメリカ印象記』の結末近くでヘンリー・ジェームズはアメリカ合衆国における美の将来に数ページを当てた。と言うのは、彼にはどうしてこの国で美には将来がないのか分からなかったからだ。彼は、「先入主（偏見）の全くない国土、早まった判断の全くない大気、途上で規範、規則や単に嫉妬深い伝統という古めかしい

25) Joseph Alois Schumpeter (1883.2.8-1950.1.8) アメリカ（オーストリア生まれ）の経済学者。ハーバード大学教授（32）～『理論経済学の本質と主要内容』（1908）『経済発展の理論』（1912）。

難関に全く出会わないのに、芸術の偉大なる勇敢な冒険がなぜ前例のない条件下で起こらないのか、と人は不思議に思う」ことについて語っている。

私たちはこれらの前例のない条件を説明するためにここにいるのか？ジェイムズがヘーゲルの「歴史の終り」を新たなチャンス、新たな土地の開拓として解釈しながら、「歴史の終り」に新たな取り組み方を示すことは可能だろうか。

ジェイムズは、世界がアメリカをゴミ捨て場として使ったことに気が付いていたようだ。ヘンリー・アダムズ²⁶その他と同様に彼は、ヨーロッパはその人間のゴミをここ（アメリカ）に捨てたのだと考えた。そして私たちは、最大の危機にあったヨーロッパが今世紀アメリカの介入によって、自分が捨てたゴミの子孫によって、救われたことを知ったジェイムズは仰天しただろうと考えなければなるまい。

ニューヨークの Lower East Side を訪れた時、ジェイムズは自分が見たユダヤ人移民に動揺し、彼らの異国的で見込みのない風采、おどけた仕草そして早口で訳の分からないおしゃべりに愕然とした。

これら全てのことが活発な想像力に一そして特に私のような東ヨーロッパ系ユダヤ人の子孫に一与える奇妙なアイロニーには際限がないのである。

26) Henry Brooks Adams (1838-1918) アメリカの文学者、歴史家。ハーヴァード大学教授のかたわら〈North American Review〉誌を編集 (69-76)。引退後は著作や旅行を事とし我が国を訪れたこともある (86)。*The Education of Henry Adams* (1904) は物質文明にあきたらない文化人の懐疑を表白した自叙伝である。*History of U.S.A. during the administration of Thomas Jefferson and James Madison*, 9 巻, 1889-91.

後記) Saul Bellow のエッセイ集 *It All Adds Up* (1994) の試訳シリーズ(5)である。前4回は、他学論集に博士課程後期在籍中の成果として指導教授との共訳の形で発表した。¹⁾ 今回で原典31編のうち9編を訳出したことになる。1989年、20世紀の二つの世界大戦後、政治的処置の結果であったベルリンの壁が崩壊し、翌年東西ドイツが統一された。さらに91年12月冷戦時代の大国の一極を成していたソビエト連邦が崩壊する。ベローは、1930年代血気盛んな若者の習いとして当時の左翼思想に心酔した。友人たちとイデオロギー論争に夢中になっていた頃を懐かしみつつ、*Partizan Review* 誌を中心としたニューヨーク知識人とその共産主義から離れることになった自身の作家的使命をも確認している。作家は、ソ連崩壊の報に接して、かつてトロツキー信奉者でもあった自身の共産主義への思いを語ることにしたと言えよう。ベローの長き半生の回想は、激動の20世紀を回想することに重なり、私達読者は20世紀の生きた証言を目の当りにすることになるのである。

ベローの関心事は、知識人としての作家に与えられた使命—彼に依れば、「歴史の一証人」である—をいかに果たすかにある。私生活で繰り返し結婚・家庭の破綻を体験しながら、人間としてはどう解決すべきかを自らの課題としてきたに相違ない。まさしく精神的には満身創痍の人生である。それ故、ベローのメッセージは、哲学者のように高みから発せられた高邁な思想ではなく、一般人の一敗地にまみれた時点から発せられた生命感あふれる肉声に近い。但し、それがいわゆるアメリカ自然主義作家のものと著しく異なる点は、一度作家固有の知性というフィルターに掛けられていることである。従って、作品はリアルであると同時にスピリチュアルであるという特性を持つ。後者の特性は殊に、作家自身が作品中でしばしば用いている“transcend”という語で表わされ得ると言えよう。これらの文学的特性—自然主義的、超越主義的—は、ソール・ベローが紛れもなくアメリカ文学の伝統を受け継ぐアメリカ人作家であることを端的に示している。

1) 『福岡大学人文論叢』第32巻第4号；第33巻第1号；第34巻第1号；第4号。

次に、ソール・ベローにおいて東欧からのユダヤ移民二世としてのユダヤ性は、どこに見出されるかという点を考えてみたい。ベローの母親は、祖父や兄弟たちにタルムード²⁾学者を持ち、子供の教育にも熱心な女性であった。夫が事業に失敗したため、カナダの親戚を頼って移住したが、ここでも夫が失敗を重ねたので、さらにアメリカ・シカゴへ流れついた。決して豊かではない暮らしの中で長女には女の子のたしなみとしてピアノを、末子のソールにはバイオリンを習わせるという情操教育も忘れなかった母親である。この母の願いは、三人の男子から一人でもタルムード学者が誕生することであった。しかし一家の経済状態を回復するには一刻も早く年かさの長男・二男が稼ぎ手になる必要があった。当然ながら母の期待は残る末息子に集中した。母ライザは、残念ながら、末子の成人を見届けることなく、ベロー17才の冬に病死する。³⁾ 母の死は、男性だけの一長女は結婚していた一家族を離散させることになる。年若くして自立せざるを得なかったベローは、やがて高等教育を受けて後家庭を持ち、作家を目指した。作家への道は決して平坦ではなかったが、前述した *Partizan Review* 誌への寄稿作品がニューヨーク知識人たちの高い評価を得て輝かしいデビューを果たすことになった。

タルムード学者の社会的立場とは、おそらく「神の言葉、旧約聖書の最高の理解者・解釈者」であるユダヤ教教師ラビと同様、「共同体の指導者であり裁きの庭の調停者であり、身の上相談のカウンセラー」⁴⁾であったろう。ベローは、職業としては人間を描く作家を選んだが、その目指すところは結局、母が終生末子に望んで止まなかったタルムード学者の務めに共通することとなった。そもそもラビが説くユダヤ的生活には「飽くまでも地上的倫理的な

2) Talmud (ヘブライ語で、学習・研究の意) ユダヤ教でモーセの律法に対して、まだ成文化せず十数世紀にわたって口伝された習慣律をラビ達が集大成したもの。本文であるミシュナ (Mishnah), その注釈であるゲマラ (Gemara) の2部から成り、広くユダヤ民族の社会生活を物語る。

3) この辺りの事情は、小説 *The Adventures of Augie March* (1953) や *Herzog* (1964) に描かれている。

4) 渋谷雄三郎『ベロー—回心の軌跡』(冬樹社, 1978年), 14-16。

基盤の上で神意の実現に努力するという特質⁵⁾がある。他方ペローが目指す作家的姿勢は、常に文学は「時代の解明に不可欠の源泉」であり「思索的力の根源」であるとする、文学への確たる思いに表わされる。両者共に人間の根源にある「魂」の問題と深く関わることで一致しているのだ。

さて、シカゴを代表する知識人と目されてきたペローは、典型的アメリカの大都市シカゴの変遷を語りながら、アメリカに住むことの意味を探る。移住してきたシカゴでアメリカ人として生育した作家は、「シカゴの街路は私のものなのだ」と言い切る。その彼にとって「すべての成功—経済的、工学的、組織的—の代価は、人間の品位の下落、シカゴ（あるいはニューヨーク、ローマやキエフ）に見られる荒廃かもしれない」と思われるのだ。さらに、移民二世として、「アメリカ人であることは、領土や言語の現象ではなく、概念つまり、実は一組の観念であった」と洞察する。また、（アメリカという国の）「歴史的発展が抽象概念の選択で始まる」ことの重要性を示唆して「現代の人類は、発展のどの段階においても抽象的な選択を避けられない」と言う。結論として、現代の無秩序な現実という「巨大な複雑系は、最高のデータなのだ。それは、私たちの偉大なる与えられた状況なのであり、私たちのものなのだ」という大いなる認識—それは、作家ペローが感知した現代に生きることの意味である—を提示し得ている。

5回の翻訳で明らかになったことは、前述したように、作家ペローにとっての関心事は「知識人の問題」と「魂の問題」であった。前者では、作家と知識人は両立しないという自説を、後者では「魂とその神秘という厄介な問題を抱え込んで、、、、これらの力の存在に自らの生命を賭けている」作家の一人であるという自身の立場を語っている。これらペローの根源的問題については機会を改めて論じることとしたい。

5)渋谷, 14。